●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

# 世界婦人

○本號目次


△結婚及離婚　社　說（一）
△心臓　小山内　薫（一）
△悲慘なる虚榮　門田　稻葉（二）
△志士の末期　二葉亭主人（五）
△貧録の一夢　大手　晴月（五）
△味噌こし篇　木下　尚江（六）
△孤燈の影　絲川　松子（六）
△婦人開放の道　大石　祿亭（七）
△戀愛と結婚　同　上（七）
△男女交際の寸法　草地うら子（七）
△平民樂話　上瀬なか子（七）
△ルイゼ皇后傳　記　者（一）
△海内時事　記　者（二）
△海外時事　記　者（三）
△諸新聞槪評（五）
△社告（五）
△寫眞版（一）


## 結婚及離婚

建部氏の離婚問題と石倉氏の結婚問題とは、近時著しき世論の題目となつた、吾人も一言するの責任があると思ふ。

吾人は總ての方面に向つて自由主義を唱ふる者である、舊法律、舊道德、舊習慣、あらゆる形式を超脱したる絕對自由の天地に於て總ての事柄を考へて見たいと思ふ、而して斯る立地に在る吾人は勢ひ自由戀愛論に窮極せざるを得んのである。

既に自由戀愛論の原理の上に立つとすれば、最早議論は無いことになる、建部夫人の離婚も石倉氏の結婚も道德上一點の非難すべき點は無いものと思ふ、併し此の如き議論を突然聞かば世の人頗る極端なりとして眉を顰むるであろう、故に少しく說明して置かう。

吾等は常に思ふ、今日行はるゝ結婚は多くは無愛情の結婚である、殊に貴族や富豪の結婚に於て最も著しいのである、而して之れは、今日の家族制度や結婚上の習慣が然らしめたのだ、家の爲めに結婚したり、家名や階級によつて嫁を迎へたりする、そして無愛情の結婚を行ふが故に從て悲慘なる離婚が多いのである。

而して一旦結婚したればとて、若し眞に愛情が無いならば何時にても離婚するより外は無いと思ふ、今日の多くの離婚の場合に於て男子は實に卑劣な所爲をする是は畢竟するに或は虛榮に驅られ、或は習慣に負けて愛情無き結婚を僞つて行ふの結果である、若し男子にして少しにても卑劣なる行がなかつたなら、女子は斷じて之に忍ぶの必要が無いと思ふ、乍併、コヽは一概に單純には申されぬ、假令夫が少しの惡事を有するにしても一旦結婚した女の身としては仲々に愛は去らぬもの、人知れぬ苦勞をするも、實は其内に樂みが深いものである、けれどもコヽは唯だ各々の趣味によりて異ること、理窟を以て規矩すべきで無い。

石倉氏の結婚問題に就ては種々なる議論がある樣なれど、吾等は『道德上』に於て非難すべき點が無いと思ふ、よし結婚する時に於て既に夫人が身おもになられたとしても、其れは各人の趣味に於て厭だと思ふ人もあろうが、平氣な方もあるであろう、若し石倉氏新夫婦にして滿腔の愛情を有して居られたなら、其結婚は實に立派なものではあるまいか。

吾等は戀愛を以て結婚の唯一要件とする者である、故に戀愛無くして行ふ結婚や戀愛無くして繼續する夫婦關係は大なる罪惡である、併し茲に一言せざるを得ぬものがある、戀愛は結婚の唯一要件ではあるが、結婚其ものは『人生』の一部分である、故に戀愛さへあれば人生社會上の總ての障礙を打破して、結婚するが果して正當なりや否やは疑問である、例へば親に孝ならんと欲せば戀愛に忠ならず、といふ樣な場合である。戀愛は素より自由なるべきであるが、併し『人生』其ものの目的の爲には其戀愛をも棄てざるを得ざる場合がある、此點は時と場合によりて決定せねばならぬ、世には戀愛を以て人生最上の目的の樣に唱ふる人がある、吾等は之を人生の一部と觀ずるのである。

石倉、建部、兩氏の問題よりして感じ出でたる儘を陳べた次第であります。

ルイゼ皇后貧家を訪ふ

## ルイゼ皇后傳

普魯西の皇后ルイゼは千七百七十六年三月十日、ハノーベルなる父メックレンブルヒ、ストレリッツ家のカール公爵の居城に於て生る。佛國革命戰爭の頃は難を避けて暫時、ダクセ、ヒルドブルグ家のフリードリッヒ公爵の妃、シャロッテと同じく居る。千七百九十三年、フランクフルトにて普魯西の皇太子、後にフリードリヒ、ウィルヘルム第三世と會する事あり。太子は深く皇后の容色の美なると品位の高さとに戀着し結婚を求む。同じき年の四月二十四日結婚の式は擧行せられたり。

普魯西の皇后と成りてより、國民の尊敬と愛慕とは一方ならず、而して普魯西と佛蘭西との間に爆へたる戰爭の間、皇后及其一家の上に襲れる災禍は獨乙歷史あつてよりの慘事と稱せらるゝが、此間に在つて毅然としてよく耐忍びし事も亦此國空前なりと聞く。エナ戰後皇后は夫王と共にケニヒスベルヒに赴き、アイルウ及フリードランドの戰に於て普魯西が全く佛蘭西の武威に屈從せし時皇后はテルジツトに於て親しく奈翁に謁して訴ふる所あらんとせしが、其功空しかりき。

千八百八年の首、皇后は國王と俱にメメルよりケニグスベルヒに赴き、年の暮に漸びかしこより聖彼得堡を訪ひ、千八百九年十二月二十三日伯林に歸る。千八百十年、ストレリツクに父を訪へる時國王に抱かれて崩ず。

戰役の間奈翁は其狡猾の心を以て皇后の令名を毀損せんとせしも、此事却りて普魯西人をして益皇后を愛慕せしむるに至れり。

普魯西のルイゼ勳章、ルイゼ女學校、ルイゼ保母講習所は皆陛下の德を彰はすを旨として設立せられたるものなり。今もシャロッテンブルヒの宮廟には、ラウフの手になれる美麗なる紀念碑及影像屹立せり。ルイゼは獨り高尙なる品位と美麗なる容色とを兼ね備へたるのみならず博愛の志厚かりき。養育院に臨み貧家を訪ひ普く民の疾苦を問ひし事尠からずと聞く。

吾人は一箇人として道念高く情念厚きルイゼを取る茲に掲げたるは此故に外ならず。

## 心臓

小山内薫

温き掌二つ
左右より偶と近きつ
あと思ふ
間に包まれて
わが心臓
盲となりぬ。

温き兩の掌
左右より迫り來りつ
あと思ふ
間に冷え果て、
わが心臓
氷となりぬ。

冷え果てし双掌は
左右より愈迫りつ
あと思ふ
間に刺出で、
わが心臓
血汐となりぬ。

○次號豫告

△小說志士の末期（承前）　二葉亭主人
△未定　安部　磯雄
△未定　石川　旭山
△小說北山おろし　逸　雲留
△小說ヘンペツクト、ハスバント　原　霞外
△小說千鳥　加藤　眠柳
△戯謔　草地うら子
△日本料理　嘉悦　孝子
△園藝　久田　二葉
△衛生顧問　某　女醫
△女詩人サツホー傳　記　者
△其外材料澤山

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 悲慘なる虚榮

門田稲葉

儒教主義の舊思想は、依然として社會を司配す。社會が尚は此舊思想を脱却し得ず、毎に之を萬象に實現しつゝあるを見、吾人は轉た憂心忡々たらざるを得ざる也。見よ、死せるが如き方今の教育家が、所謂婦德なるものを稱するに際り、彼の『貞婦は二夫に見えず』の陳套語を以てし、世の婦女をして、悲慘なる虚榮の念を趁はしむるが如き、常に是れ舊思想の教訓に基するに非ずや。敢て問ふ、二夫に見えざる婦女は、必ずしも咸く果して貞婦なるか、再縁したる婦女は、必ずしも盡く不貞なるか。倶に是吾人の深く疑問とする所にして、之に對する二三の實例は、以て其全豹を品隲し得ざる可く、矧んや鐵案を重大なる婦德問題に下すを得ざる可からざるをや。

蓋し、寡婦たる者の徑路には、必ずや精神上、物質上より受けたる、沈痛にして悲慘なる事實の蟠る在らん。而も其反面には、奴隷的制度施行せられ、即ち男子の獸慾は、或は蓄妾と成り、或は淫縱と成り、更に彼等は自ら省みる所なく、單り婦女の貞節をのみ上下せんとするは、聖賢の遺訓も、我が姉妹に對しては、怖ろしき呪咀の惡文字たるを失はず。故に吾人は寡婦の境遇如何に關らず、其總てに最も深刻なる同情を寄與せんとす。設し夫れ世の寡婦の赤裸々なる懐舊談を、仔細に眞摯に傾聽せんには、自ら一篇の小説的事實も是あらん。或は熱き紅涙を濺ぎつゝ耳を欹つる悲劇中の悲劇も是あらん。小説的事實と云ひ、悲劇中の悲劇と云ふ、即ち其多くは云ふ迄もなく、貧富を論せず、社會に於ける婦人の地位は、事實に於て最も低く、其權利の總てを男子に奪れ、法律亦女權を擁護せざるに原因せずんば非らず。就中、夫婦の間に一子をも儲けざるが故に破鏡を嘆じ、忍ぶ可からざる痛苦を、腔底に深く秘する婦女あるに至つては、其極に達せる男子の暴状、豈に憎んで且つ惡まざるを得んや。然るに何を苦んで、我が姉妹は淺墓なる虚榮の念に驅られ、其表面を繕はんとして焦心苦慮するか。而も老いたる寡婦は、或は能く後家をたて通すを得可しとするも、未だうら若き可憐なる寡婦に至つては、焔々と燃ゆる胸宇の情火を如何せん。志操若し堅實なれば即ち可、如くも否らざれば、縱し如何なる訓戒を以て之を律せんとするも、四圍の誘惑の爲に情緒終いに紊れ、俗諺の所謂『若い後家さんの寺參り云々』の皮肉なる諷刺を、到底免るゝ能はざる哀む可き境遇に墜ん。然れども記せよ、依然として儒教主義の舊思想を社會が信仰するに於ては、社會風教の保維を危くするに至る可きこと、寧ろ是れ當然必至の現象にして、換言すれば、所謂儒教主義の自殺的教訓が輕浮なる節操と、皮想の道德とを涵養するに努め、而して婦女の情慾を押へんとするの餘弊は、即ち茲に至らしめたるに非ざる無きか。

然らば即ち、如何にして道德の根抵を築かんとするか。曰く他なし、儒教主義の舊思想を排除し、奴隷的制度の打破を期するに在り。然らざれば、婦人は永久に强請的結婚を爲さゞる可からず。而も半面の識なく、其性行を知る能はざる新郎と、泣いて形式的に偕老同穴を契り、四海波治らず、新婦の小さき胸には大波小波寄せては返へし、一夜を泣いて明せる者も在りと聞く。斯の如きは、果然、西山の日を百年同くし謝するを得ずして、破鏡を嘆ずるに至らん。縱し又、子てふ鎹の爲に維がる惡縁ありとせば、生涯屈從と檢束とを喞つ、炊事裁縫洗濯の常傭人たるに終らん。若し夫れ、配偶者の温情掬す可きなく、氷の如く闇く冷かなる

（三面の初めにつゞく）

## 海内時事

### ○ストライキの續發

曰く九州炭坑のストライキ、曰く三菱造船所のストライキ、曰く郵便脚夫、曰く淺草の植字工、曰く神田の形付職、曰く九州工女。頃來ストライキの續發は全國各地の資本家を恐慌せしめつゝあり候。

就中、長崎三菱造船所に於ける大工職の活動は殊に吾等の注目すべきものに候。同造船所は年々物價騰貴しつゝあるにも拘はらず、少しの増給もなく、加之、往年九時間なりし勞働時間を十時間に引き上げたるより、今回運動の大工五百餘名連判して、増給及び時間の短縮を請願したるも、會社にては其理由を是認するも若し許容せば會社の威信に關すとの理由を以て拒絶せしかば、職工等の憤慨一方ならず、他の木形、鍛工職工等八十人も之に加盟して、飽く迄反抗すべき意氣込の由に候。

陋劣なる會社の今後の態度如何に依ては或は第二の足尾を現出するやも計られず候へ共、運動者は皆平和なる方法を取る事に勉め居候へば、必らずや模範的大ストライキを現出致し候事と存候。吾等は加盟者等が、犧牲者たるべき委員の家族を救助すべく、血判を以て盟約を結び候を聞きては、壯なる意氣の底には常に悲慘なる犧牲のあるべきを思ひて涙下らざるを得ず候。嗚呼や、自覺の域に進みつゝある全國の勞働者諸君！今や方に諸君の時代は開かれつゝある也。

### ○「女大學」の敗亡

日本社會學のオーソリチーとして、大言壯語を以て有名なる文學博士建部遯吾氏は、離婚問題に就て端なくも世人の攻擊する處と相成候。

幼より「女大學」的教育を受けて温良貞淑なる芳子夫人は今より六年前、父子爵谷干城の名門を背にし持參金若干を齎らして、建部氏に嫁し來り、死すとも夫の家を去らじの決心もて、甲斐々々しう夫に仕へ來り候處、事なきに夫の虐待甚だしく、堪え難きを忍び、涙なくして今日に至り候も、無法の行爲は日に募り行きて、惡罵嘲弄、甚だしきは、妊娠の身を毆打てるさへ稀ならず候へば、父干城氏も遂に堪り兼ねて離れじとする芳子夫人を呼び戻し正式に離婚の手續をとりし候由。

吾等は今更ながら、現代の學者先生達の横暴無情なるに驚くと共に、「女大學」的教育の下に養はれし日本婦人が如何に悲慘なる境遇に沈みつゝあるかを察するに餘りありと存候。殊に父干城氏が芳子夫人婚嫁の時「死すとも此家に歸るな」といひ聞かせ候前言を顧みず、われから愛娘を暴徒の手より救ひ出し候は明かに「女大學」の事實上に於ける敗亡なりと斷言し得べく候。さはれ輿論のすべては、畢竟芳子夫人が奴隷的境遇に忍び候を賞贊せしものにして、若し夫人が自ら夫の横暴に反抗して決然袂を掘つて其家を出で候はゞ、世人は果して何とか申すべき。吾等は世の横暴偽善なる男子と、かゝる小膽無智なる社會とに向つて邁進突擊せざるべからず候。

### ○丈夫も耻づ

過般足尾暴動の巨魁として拘引せられ候南助松氏の夫人に臼井操子と申す人有之候。姉は齡未だ二十に滿たず、色白く容清き而も氣魄凛然たる革命婦人に候。父母兄弟を棄てゝ南氏に從ひ、郷里北海道を去りて遙に足尾に來り、内に夫を勵まし外に同志を助けて、主義の爲に奮鬪すること多年、足尾事件の爆發するや南氏等拘引の後を受け、か弱き女の身を以て、四面包圍の中に獨り至誠會の孤城を守り、右手會の事務を整理し、左手會員の離散を防ぎて、幾多の迫害に堪へつゝあり候。血腥き革命運動の裏には可憐なる婦人の内助なかるべからず。肌を劈く寒風に獄裡の夫を想ひては、紅涙潸々として、腸も斷ち候べきを。あゝ此氣、此忠、當に丈夫をして起たしむべく候。百の「世界婦人」畢竟何するものぞ、一人の操子姉あれば足る。

### ○醜婦の煩悶

醫術開業試驗及第者中、四人の婦人ありとて、其肖像及び小傳は新紙上に掲げられ候。各々志操の堅實にして勉强の實なりしは兎も角、吾等の誠に目を惹き候は、何れも容貌美はしからぬ婦人のみなる事に御座候。彼等は物心つきてより、これがために天を恨み、人を怒りし事幾度にか候ひけん。あゝ徒らに彼等の成効を讃美するを止めよ。是れ小さき胸を惱ませし永き煩悶の結果に候。

### ○日本社會黨大會

日本社會黨第二回大會は去る十七日、東京神田錦輝館に於て開かれ候。黨員六十名の外、來賓數十名有之、堺、田添、幸徳諸氏の沈痛熱烈なる討論ありし後、決議案を可決して閉會いたし、懇親會ありし由に御座候。

### ○平民新聞の告發

右大會に於ける幸徳秋水氏の演説と決議案とを載せたる、十九日の平民新聞は、二十日に至り、告發せられ、發賣頒布を禁止せられ候。

### ○政府の暴戻

田中正造翁の片腕として、最も熱心に谷中村を助けつゝありし遠藤友四郎氏は去る十七日突然拘留せられ候。翁の落膽如何ばかりに候べき。政府はあらゆる陋劣なる手段を以て、老義人田中翁を苦しめ候也。噫。

### ○婦人記者倶樂部例會

去月十九日同會の開かるべき旨案内有之候故、本社より福田主幹と九津見女史とが列席いたし候。同倶樂部は婦人に關する新聞雜誌記者の組織いたし候もの、從來度々會合して婦人に關する時事問題を討議いたし居候が、今回は彼の有名なる石倉文學士結婚問題と建部博士離婚問題とに就て各々意見を交換いたし候。列席の面々本社の二人を除く外、悉く男子のみ。平民社の荒畑氏の外は何れも黴のはえたる家族主義、家庭神聖論、女子服從主義、子供耕論などを振り廻し、建部博士を非難すると共に芳子夫人をも誹り、石倉文學士の事に至つては一人も褒める者はこれなかりし由、噴飯の至に候。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

**家庭に在りて、何等精神上の慰樂を求む**（二面の二段よりつゞく）る能はずんば、鉅萬の富を擁すと雖も、果して何の用かある。唯だ夫れ、鉅萬の富に戀々として執着し、屈從と檢束とに忍ぶ婦女ありとせば、前借金の爲に吳越の客を送迎する娼女、乃至は春を賣るの錢樹子と何ぞ擇ばんや。斯の如き婦女は其去就如何に關らず、冠するに貞婦の二字を以てする能はざるや勿論也。而も社會により以上悲慘なる境遇に處する婦人鮮しとせず。之を例證するの甚だ煩に耐えざるを以て、其一二を擧げんか、男子は甘言を以て婦女を誑し、巧に接近して先づ己の歡慾を恣にし、一度び汚されたる身の秘密を永久に包まんとする、いぢらしき心事婦女にあるを見て取るや、徐ろに其双親に取入り、最愛の女を我が妻に迎へ、之を立身成功の階梯と爲し、目的既に達せんとするや、附するに種々なる難癖を以てし、弊履の如く之を棄てゝ顧みざる無情漢在り。尙は甚だしきは貞操なる婦女に對して、淫奔、姦通等の汚名を蒙らしめ、惡德新聞記者をして、虛構捏造の事實を報道せしめ、表面に於て妻の辯護を爲し、餘儀なく世間を憚らんとするが如く裝ふ、何等の獰惡奸曲ぞや。

更に近き實例に見よ、彼の日露戰爭に於ける幾萬の戰死者中、結婚の當夜令狀に接して出征したる者あり、故にうら若き身を以て未亡人と成れる者は多きに至り、又良人の遠征中分娩したる姙婦もあり。未亡人問題は、早く既に一時社會問題として喧傳せられたるも、之に對する何等の解案を與へし者あるなく、加之、戰死者の戰功賜金は、可憐なる未亡人の扶助料たらずして、豺狼の如き我利々々亡者の手に握られ、終には未だ良人の遺骨をも送葬せざるに離別せられ、雨の如き紅淚を以て、餘所乍ら之を送り、香花を手向けるをすら憚らしむるの一事は、**此未亡人をして、終に悲慘なる虛榮の巷**に奔らしむるに至る何等の悲慘ぞや。而も良人の遠征中に於て、分娩したる妻女に對し、其良人の下したる宣告の果して如何なるかを聞け、曰く不義の懷姙也、夫が死生の巷を彷徨しつゝあるをも顧みず、汚泥を國家の干城たるものゝ面上に塗抹したる不貞女は、唯だ離緣の一あるのみと。若し夫れ、資產ある者は父兄の家居に寄食するを得可しとするも、良人に賴りて世を送らんとする者に至つては、事茲に極れりといふべし、今犂鋤を執つて勞働せんとするも、稚兒其手足に纏ふて力作することを得ず、母子相擁して空しく路頭に迷ふのみ。而も終に悲慘なる虛榮の念に驅られたる末は、寧ろ親子相抱擁して入水し、身の潔白を示さんと覺悟の臍を固めしむる也。社會の婦人に對する、夫れ斯の如く暴戾殘忍にして以上列擧するの實例は、一として奴隸制度の打破を急促せざるは無き也。

乃ち吾人が大聲疾呼、女權の復舊を絕叫する所以は、彼の奴隸制度を打破開放し、其地位を進むると同時に、道德の根底を築かんとするに在り。道德にして其根底深く且つ固からんか、婦女と男子と握手するも、將た接吻するも、決して風敎上何等の影響する所なく、男女七歲同席を禁制する底の危險なきに至らん。夫婦相愛し、家庭團欒し、四海兄弟共樂し、希くは貞松と作りて千歲に古りんことを。卽ち奴隸開放、男女共樂は是れ吾人の最大目的なり。此大目的と相背馳するが故に儒敎主義の舊思想は絕對的に排除せざる可からざる也。

### 霜

朝霜や寐擾はしたる賤が家　さだ子

一しきり狐なきけり霜の聲　とよ子

吐く息のいと白うして今朝の霜　とよ子

## 海外時事

### ○健脚の女丈夫

ウイリアム、モリス氏も輕淺のエレン孃ならびに沈毅なるバウ、メイ孃と共に、かのクラーク夫人が多年の辛棒と强健なる體格とを有せるには、讃辭を吝まざるや必定也。夫人はハートフォードシヤー州のバルドックより三里離れたる、彼の花園町の稱あるニユンハムに於ける老練の郵便局長にして併せて郵便配達夫たり。機會ありて吾人は、御用の爲め過去二十年間に於て夫人が踏破せし道程の、無慮十有萬哩の驚くべき長距離なる事を知り得たり。

夫人は現に老齡六十有八歲、而も尙矍鑠として壯者を凌ぎ、有髥男子をして後へに瞠若たらしむるの意氣を有し、晝夜を論せず晴雨に關らず、日每双肩には重き郵便物を納めたる袋を擔ひ、十一里四方の淋しき村落を巡り歩きて毫も疲るゝ色なしといふ。殊に驚くべきは其視力の强健なる事にして、如何なる闇夜と雖彼の通常人と異り提灯を携ふるの勞をいたく吝むの一事也。是れ身健かにして心常に誠直なると、平靜なる胸裡一片畏怖の念をして入らしめざるより、かくは常人の及ばざる視覺の鋭敏も、自然に得來りしものならむ。吾人は今此驚くべき女丈夫の片影を茲に傳ふるを得て、更に吾人が社會黨としての希望を、一般同胞に對して、又クラーク夫人に對して述べて止まんと欲す。他なし、夫人が第一歩を踏み出すを得ざるに至りし日、或は踏破に當つて平素感じ居たりし愉快の感覺及自恃の情念が、苦痛の感情と入かはりたるの日に於て、夫人には實に名譽ある安宅の現前せんとせるものなるべき事卽是。

### ○婦人の工學者

婦人公共事業に興味を有せる人々の悉知せる彼のカーディ、スタントン夫人の令孃ノラ、スタントン、ブラッチ孃は、土木工學に造詣する所深き人なりしが、此程紐育市に供給すべきカスケル上水工事の部員として採用せられたり。然れども英國に於ても此種の實例無きにあらず。アリス、ペリー孃は工學得業士の稱號を有する人なるが、嘗にガルウエイ郡の陸地測量官に補せられ、父の職を繼ぐことゝなれり。

### ○ナイチンゲール女史と選擧權問題

婦人中の婦人とも稱すべき婦人達はかのフロレンス、ナイチンゲール女史が選擧權問題に關し懷抱せる所を聞かば、聊かならざる興味を覺ゆる事なるべし。女史は實に婦人參政權の獲得を確信せる人にして其言ふ所下の如し。

家政を整理するものも租稅を納付するものと齊しく、吾人が拂ふ金錢の費用に關して發言權を有すべきは、殆んど自明の公理ともいふべき者にして、もと金錢が人類に最も必要なるものなるが如く、是亦人類に最も必要なる利害を包有する者なればなり。

ニユー、エーヂ記者は更に言を添へていふ。吾讀者にして參政權に關して尙首鼠兩端を持するの徒は、社會各方面の婦人の內にて世の尊敬を受け、名譽を擔へる人は皆參政權の請求に贊成せるものにして、齒牙に懸くるにも足らざる輩が多く無可否論者若くば反對者なるを知らば、蓋し思ひ半に過ぎざるべし。男子の寄生蟲を以て甘んじ唯々諾々之が頤使する所となるが如き女共は、斯くせば女らしからず、かくするは女らしなど、無用の詮議立に而已耽けり、補綴の功を嘖々して措かず。然れども世或はかくの如き無氣力女共よりは公共社會に活動する女子、男子の奴隸たるを以て得々たる婦人よりは之が好伴侶たらんことを期せる女流に却りて功績の勝れるものある事なきか。吾人は婦人にして舞踏會に、裁縫所に、或は喫茶俱樂部に赴き敎育會に出席し政治運動に參與する方、廚房の看守を以て任ずる輩よりは遙かに女らしく且つ德操を全うするものあるを覺ゆ、と。

### ○維納通信

此度墺地利國會にては、男子選擧權法案が婦人の政治的集會に參列する事を拒否せるに對し、之が撤回を求めたる請願書が提出せられたり。オスネル博士は多年婦人運動の贊助者なるが、此度、投票の爲めには少額の費用を要するに止るが故に法案變更を求めたし、との意見にて、下の如き演說を爲せり。

婦人は公共生活に風馬牛たるべしといへるもの、理由とする所は甚だ所據なき者也。婦人は勞働者也、雇人也、組合の主領也、其他各般の供給者也。卽ち輓近の社會上、經濟上の關係より渠等は最早其舊窠たる廚房を立ち出でゝ久しく、或は公共の事業に携はつて給料を得るあり、或は社會的生活を營めるあり、已にかくの如くなるを以て議會に於て各自の利害を定むるは固より渠等の權利とする所也。

### ○伯林通信

伯林に於る世界文藝協會は其幹事として次の諸姉を選擧せり、曰はくポール、アダム、曰くオーグスト、ロダン、有名なる記者ブファンサン、ヴアンディ、著述家たる故夫の地位に代りたるマリー、ルイベッチル、ウォルフガング、キルヒバッハ是也。かくの如くして吾人は刻一刻、歩一歩、吾人が地步を固めつゝ着々として進みつゝあり。假令其質の揚る事は遲緩なるにもせよかの舊套的偏見よ、常識及び善良なる感情の前に、漸々其道を讓りゆくなり。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 小說

# 志士の末期（ポリヤーノフ原作）

二葉亭主人譯

（三）

想へば其頃は一生の花であつた。世故に通じた、冷静な、年寄つた人達でも、かゝる折には調子に乗つて、意氣昇り、其活動の効能を信じ過ぎる弊に墜ち易いもの、況や彼はまだ乳の香の失せぬ二歳の事なら、あどけなく浮かれ易く、筆の力舌の力を信ずること厚くして、世路の難きを感ることは反て闕けてゐた。人間の事は皆明白で造作もない事のやうに思ひ、何物か能く眞理の力に勝たむと固く信じてゐたから、人に對つて眞理を告げさへすれば、人も自分の如く深く厚く之を信じて、熱心にその說の流布に勤めやう、さすれば遊說兩三年にして、もう赤旗を揚げるばかりになる、赤旗さへ揚げれば、壓制と虚僞とに充ちた舊制度は其旗風に吹き崩され、朝霧の風に散り又日光に消ゆるが如く、忽ち跡方もなくなると思つてゐた。かう思つてゐたのは黄口の彼ばかりではない、多くの同志も實は然う思つてゐたのである。

出立の前晩、告別かた〜今一度何角と眞理のお話を伺ひたいとて、宿へ訪ねて來た者が數名あつた。中にジプシイらしい面相をした、紅顏の一靑年があつたが、凝と視据ゑて話を聽いてゐたあの陰しい眼光、やがて、そんだら彼畜生共が威張りこくつて人の生血を吮ひくさるも、最う永い事ちやござりましねえねといつた、年頃の深い怨みの響いたあの音調、それが目の底耳の底に染みて今に忘られぬ。もッと逗留して居て吳れの、再遊の暇がなかつたら、同志を代りに寄越して吳れの、新刊の書物は成るたけ多く送つて吳れのと、懇な賴もあつた。其日の朝は、宿の老母が辨當代りにと麥粉を捏てケーキを燒いて、何といつても、まあ持つて行かつしやい、お前樣はこれ旅の人だと、强ひつけたその信切には、泣かずには居られなかつた。

あゝ、何たる殊勝な、好い人達であらう！

此時の經驗で彼が平民を信ずる念は愈々堅く、殆ど迷信に陷つて、凡そ平民とさへいへば、皆ありと所有德は愚か、ない德までも備へた人のやうに妄想するやうになつた。さて惟ふに、夫の紳士ばら、特權を挾むで我は顏に振舞ふ輩は、新主義を容るゝ雅量のないこと言ふ迄もないけれど、平民は然らず、十分に共同的精神があつて、既に數十代を經來つたれば、其生活にも經驗の生むだ秩序が自ら立つてゐる、此礎の上に新社會制度を打建てんこと、左迄困難でない。平民は必ず我黨の言論に感奮して蹶起するに至らう。さすれば歷史上の一大變動が起つて、截然として爰に一新紀元を劃し、萬民一體の、平和な、幸福な新生涯に入るのも今の間。さうなつた曉には、壓制や無道や、百弊盡く形を潛めて、政治上の不平等、それにも增して有害な貧富の懸隔、それらは皆跡方もなく消失せやう、と思つてさへ、氣も坐ろになるほど嬉しい。

今に忘れぬは、一夜脫俗の偉人トーマス、ミユンツエルの文を誦した事がある。讀むで「生存とは人類の解放の爲に勞苦するの謂なり」といふ一句に至つて、忽ち電流が身を傳つて走るが如く感じた。もう、其先を讀むとが出來ず、兩手で確と熱する頭を抱へて、永い〜間身動き一つせず、此句の深長な意味に深く思ひ入れば、世には解かで止みがたい苦しい數々の問題がある、此句は恰も其一つに思ひ切つたる明白な解決を與へたものと思はれる。

其時心に思つたのは、自分は生死の大海に漂ふ、物の緣なき一粟の身となつて、世に懸離れた狹い境界に潛み、我さへ好くばと果敢なき一個の私にのみかまけて一生を終るべきでない、否々、自分は大一の系統中の一部分となり、運命に見放され、人間の無法に泣く天下の窮民と生死を供にすべきである。自分は强者に虐げらるゝ多くの弱者を救はん爲めの奮闘の中に我幸福を求めんことを欲する、全人類の爲に榮ある將來を贏ち得ん爲の戰鬪の一員たらむことを欲する。ミユンツエルの語は將來我旗印たるべし、今日以後自分は自由と正義の爲に誓て一身を献げやう……

で、其日は遊說の皮切を首尾よく濟ました氣の逸みに、これでこそ我職分を盡したといふもの、思ふばかりでも、限りなき幸福の感が胸に充ち、之に視べては世俗の所謂幸福といふものは、取るにも足らぬ空幸福、大理想に仕へるこそ眞に人間の至福だ——と、思ふと、何を目に視ても心に見ぬ、盲人に等しき人達が此間の消息を解せぬのを、偶と何ともいへず哀れに思つて、彼は其時大歡喜の淚に滿ちた眼を放ち、遙か彼方の天に消え行く廣野の果を眺遣つた。

# 黄粱の一夢（烈婦ルイ、ミシエルを懷ふ）

大手嘯月

獸せる山、寂寞の流、問ふに由なき佛の山河。汝を友として立ちし彼の「石處女」！。雄々しき叫、凜々しき面影、あはれ今那邊にかある。冷かなる歷史の頁、我は手にとらし、江山若し心有らば、生きたる歷史を我に語らずや。

佛國古來女傑多し、千秋の恨淚を飮みて、あはれ猛火一片の灰燼と歸せしオルレアンの處女。匕首を提げて妖魁を屠りし女丈夫コルデー。嗚呼其の英姿の偲ばるゝよ。我が懷ふ烈婦ローランは、御身に何を語り何を告げたりしぞ。

更に、更に我の聞かまほしきは、女傑ルイ、ミシエルの一篇悲劇の物語にあるぞかし。數ある物語の中にも我は取分け之を望む也。聞く、ルイの生ひ立ちしローレーヌの孤村は、白楊樹の蔭暗き邊古城の巋然として聳ゆるの地なりと。さるにても薔薇花の香はしき處、日々家畜を友として、無言無聲の化育に浴せし自然の寵兒、何が爲めに後年悲劇の主人公とはなりしぞや。孤村の寒夜行人音なきの時、ルイは爐邊にて祖父の物語を聽くを無上の樂みとなせりとか。談は何なりしぞ、世に恐ろしき七月革命の漸くに治まりし時なれは、血と烟とに醉ひし祖父が歷史の一頁なりしならん。さなり革命物語！。

談を聽きし彼女は憐恤、犧牲の淚に咽び、屢々祖父の膝に泣き伏したりしとかや。淚！淚！淚！生命の淚！、若き兩眼より湧き出づる眞個の血淚、撲殺せられし一匹の犬にすら哀情の淚を灑ぐ彼女、などて罪なきに苦しむ同胞の上に、千斛の紅淚無きを得んや。又嘗てラメンネスの「信者の言」を再三反誦し、歔欷措く能はざりしといふ。知るべし俠氣、憐憫の情は早くも彼女の柔かき胸底に宿されし事を。

狂と言はゞ言へ、彼女の眼中義ありて邪なく、熱淚ありて冷血なし、事の成否は彼女の問ふ處にあらず、義憤の焰に身を燒く、是れ彼女の生命なりし也。チエールを刺さむとし、ガンベツタを斃さんとせしは、萬人の死を贖はんが爲なりしなり。普軍を巴里城下に擁したるが如きは、偶々熱血の一滴が迸射したるに過ぎず、無謀の誹、狂遊の譏の如きは、意に介する處にあらず。

行雲流水世は移れり、物は變れり。女史の素志事と違ひ、羇旅の身そゞろに行淚の細きを覺えたるべし、嗚、されど女史か愛憐の情、義憤の焰、永遠に其の生命は絕へじ流は竭きじ。

今宵我獨り窓下に佇めば、一片の新月遠く懸りて、春寒肌に徹しきを覺ゆ。（完）

## 短文、短歌及新體詩を募集します

▲短文　清新の趣味ある短文を募ります。嬉しき事、悲しき事、腹の立つ事、何でも郵便端書に明瞭に記して投稿して下さい。

▲短歌　新派、別に何等の制限をも設けません、しかし、あまり貴族的臭味のあるものは取りません。

▲新體詩　調の何如を問ひません。但しあまり長いのは嫌です。艶なの、優しいの、凜としたの、雄々しいの殊に革新の氣を帶びたのを歡迎します。

毎號の原稿締切は、五日と二十日です、用紙は何でもよろしい、端書は殊に輕便でよかろうと思ひます。婦人諸姉の振つて御投稿あらんことを切望いたします。

## 衛生に關する質問を募ります

本社では此度或る有名な某女醫に御依頼しまして、本紙上で衛生に關する諸般の御話をして頂くことになりました、同姉は主として皆樣からの御質問に應じて御話しをなさるとの事でございますから、皆樣は御遠慮なく平生御疑ひのある處を端書なり封書なりで御質問になる樣に願ひます。此頃は氣候が不順な爲め全國各地で病氣が流行致しますからこういふ立派な顧問に依つて平生の御養生をなさるのが肝要と存じます。


Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 味噌こし笊（山居雜感）

木下尙江

一月の初め、前橋へ演説に行た歸り途、澁川の町で味噌こし笊を買ひ求め、首玉に結んだ書物や糸の風呂敷包へ元結にてクヽリ付け、風のまに〳〵背中へブラブラさせながら、雪の山道を上つて來た。八幡宮の少こし下の所で、十歳ばかりの村の子の三四人連れ立つて下りて來るのに逢つた、其中の一人がチヨキンと頭を低げて敬禮をした、外の子供も我劣らじとように同じく頭を下げた、僕も丁寧に禮を返して互に別れたが、忽ち背後に當てドッとばかりに笑聲が起つたので、何等の珍事かと僕はステッキを停めて振り返つた、今の子供等が僕の背中の笊を指して頻りに嘲弄して居るのである。嘲弄の種子が僕自身であつたので、覺ず面を赧らめたが、子供等は僕が振り返つたので、大きな聲で笑いながら逃げるように飛んで行つた、僕も亦た歩るき出した。

然かし僕の胸中には一種不安の念が湧いて來た『何故に此の笊が嘲弄の種子となつたのであろうか』と云ふ疑問が僕の胸中に湧いて來た、味噌こし笊が何だ、別に不思議なものでも無い、何も怪しいものでも無い、又た憎むべきものでも賤しむべきものでも無い、彼等の家にも必ず一つは在るに相違無い、彼等も必ず毎朝此お世話さまになつて居るに相違無い、其れを何故に彼等聲を揃へて此の笊を辱じめ、又た併せて僕をも嘲つたのであろう、端なくも僕には是れが人生の大問題となつたのである。

すると僕の心は、彼の一人の叫んだ『彼様風俗して可笑しいなあ』の一句を思ひ出した。

『彼様風俗とは何だ？』

僕は顔を動かして我が身を見廻はした、そして僅に解釋の端緒を發見した、――成程、僕は洋服を着て居るのである、假令五年前新調の背廣で、昨冬裏返しをした品物とは言ひながら、洋服に相違は無いのである、僕は帽子を被つて居る、其れは夏冬打ッ通して三年御厄介になつた老朽ではあるが、鼠羅紗の中折帽に相違は無い、而して鼻の下に髭が在る、此の髭たるや常に友人間の物議を煩はして、數々削除の勸告を蒙むつた者ではあるが、假令是れが僕の顔に威嚴を添えぬにもせよ、添えるにもせよ、兎に角入字形を現はしたる髭たる點に疑問は無い。『髭を生やして洋服を着て、帽子を被つて居る』是れは山村僻地に於ては、村長か、敎員か、郡役所の役人などに限られたる堂々たる紳士の條件なのである、學校では每々『洋服を着て髭でも生やした人に逢つたらば、お辭儀をせねばなりませぬぞ』と其の生徒に敎へて置くのである、彼等子供が頭を並べて僕に敬禮したのは、髭と洋服とに敬禮したのである、然るに彼等は僕を背後から觀察するに及で、忽ち僕の僞紳士たることを觀破つた、村長でも敎員でも郡役所の役員でも、其他何も髭を生やした洋服の豪い人が、味噌こし笊を背負つて行くなど丶云ふことは天地の間決してあるまじき不體裁なのだ、是れは股引に草鞋の人の爲る仕事で、洋服に帽子の人の爲ることでは無い―是が實に彼等子供の眞理である。彼等は僕の背後を觀た後に敬禮しなかつたことの輕卒を後悔したのである、僕が紳士を假裝けた田夫野人であることの僞善を面憎く思つたのである。

あ丶、僕は是れが爲めに敬禮を受け、又た是れが爲めに直に嘲弄されたのだ。

こんなことを考へながら、何時しか二里の雪路を上ぼつて、懐つかしき二つ嶽の目の前に聳ゆるのを見た、心を外に取られて居たので、僕は山路の苦痛を少しも覺えなかつたが、忽ち他の新らしき疑問が、汗と共に湧き出でた『笊を背負つたゞけで、彼程に嘲弄されるものを、若し此姿で鍬を提げ、鎌を携へ、肥桶を擔いだならば、如何ばかり輕蔑されることであろう？』

妻は雪路の難澁を慰めて呉れた、忘れずに笊を買つて來たことを感謝して呉れた、併かし僕は椽に腰掛けて靴を脱ぎながらも、思ひは依然彼の問題を逐ふて走せるのであつた、田夫の子が却て田夫の姿を賤め。野人の子が却て野人の勸めを輕しめて居る、人生眞個の憂は實に此に在るのだ、勞働を貴んで遊惰を棄てる、神の敎法は只だ此の一事では無いか――』

僕は原始の神法が、實に永く人間社會から棄てられて居ることを思ふて、深く自身に省みた。

# 孤燈の影

神川松子

軒もる雨に夢醒めて
思へば悲し去年の春
優しき君が眸に
知遇の光見てしより
世情知らぬ我さへも
伏して泣きしは戀なりき。

思は如何に其宵の
夢の逢ふ瀬を微笑みて
望みの影を遙なる
雲井の空に眺めつゝ
樂しき戀の禱りを
君が情に酌みしかな。

嗚呼思のみはやれども
心の花のうつろひは
げにも果敢なき春の夢
夜半の嵐の吹くなべに
咲の盛も凋落の
運命や辛き契りかな。

夢とやげにも夢ならば
永世に寤めぬ夢なれな
只束の間の春の影
薔薇の花の高き香に
果敢なき戀の宿りしを
など永刧と思ひけむ

紅熱き唇に
歌ふは古りし愛の歌
過ぎにし虹の影追ひて
春の姿を求めては
白もしらぬ寂寥の
涙の頬に傳ふかな
希望の星の輝くも
憂の雲の晴れやらず。

胸の痛を抱きつゝ
憂はしき世に侶もなく
慰めもなく光なく
世をうみ渡る處女子の
血汐に袖をしぼる時
旅窻の雨の音しづか。

# 諸新聞雜誌批評

▲岡山評論　既に題目からして福田（舊姓景山と爲念註しおく）英子式也。女史は岡山の出也、縁故や頗る深く景山といへば新しく記憶を喚起すべし、本誌は月二回發刊にして舊平民新聞と同一體裁にして内容も整頓せり、第二號の卷頭に於ける「婦人の自由に」於て女子の參政權を叫絶せる頗る痛快を極む、其他秋水、小劍、尙江、中山等の名も散見せられたり、元來内氣で小心な日本婦人も本誌を讀めば眼識も一段とたかまるべし。

▲土陽新聞　日本婦人は自國の法律、自國の道德、自國の習慣等の爲めに政治界に於ける壓迫を受け婦學な被りつゝあり本誌は即ち之等の弊害を革新するに勉むると共に婦人自らの理想をして世界的ならしめむ目的を以て生れたるもの其主幹は當年の自由民權論唱導者影山英子（今日は福田）女史にして社説の議員諸君に與ふ、安部磯雄氏の婦人と旅行（中略）等あり吾人は本誌の目的とする所に多大の賛同を表すると共に其健全なる發達を望むものなり。

▲福島民友新聞　日本に於ける婦人運動の先驅者たる同誌本號の劈頭に「議員諸君に與ふ」と題して日本の法律は無能力者となす婦人が戰時中に於て大に盾援に努めたることより叙説し治安警察法に對して痛快なる議論を爲し其他（中略）數篇を收む殊に木下尙江氏の「盲女」は讀む者をして嘆噓せしむべく一頁のマダム、ローラン略傳は獄中のマダム、ローラン（富貴姫）と對照して讀むべし本誌は讀者を世界的婦人たらしむると同時に熱火炎々たる如き字々句々は婦人の社會に對する憤慨を表示して餘蘊なし。

▲埼玉新報　最も進歩したる婦人の思想は本誌に於て之を見るを得べし實に日本に於ける婦人運動の先驅なりと云ふことを以て見るも論說記事の内容を窺ふに足らん

▲柏崎日報　女權擴張に大に力む

# 社告

前號で豫告して置きましたれど又もや事は所期と違つて編輯者の不熟な爲めと原稿の集らなかつた爲めに期日をも外し高亭御約束通りに參りませんで洵に相濟みません、次號からはやゝ體裁をも改め面白い記事澤山に間違なく期日に出すことに致しますから何卒愍恕して下さいまし。二葉亭さんの小説は當出で〻昨年秋頃に入ることは本號を御覽に成る方の知られる所でありませう、其他鋒々豫告の黑幕の種に潜んで居た北山おろしも出ますし、加藤眠柳さんの干瀾ら掲載の運に成つて居ます外に原霞外さんの洵に面白い小說なら載せる筈ですから愛御覽を願ひます、本號は日本料理、園藝衞生顧問もみなお頼み申した方の差支の爲め但曉念出すことが出來ませんかつたけれど、次號からは必ず欠かさずに出しますし外に石山旭山氏の有名な現今の婦人問題に關する大著述の譯文をも載せる都合に致しております立派な新來の編輯主任は中途で都合の爲やめまして代つた者が忙しい仕事の暇にやつてるのですからどうも思ふ様に行きませんがまた、次號からは必ず雜誌の主任が返つて參りますから本紙は次號に於て一段の精彩を添へることゝ思はれます、謹んでこゝにお斷りかたく豫告なもいたして置きます

# 霧

なみ子

山里や夕になれば霧こめて
溫泉の町の霧の晴れ行く夜明哉　同
山深うして霧に秋なしはりけり　同
羅漢寺の鐘に消え行く狭霧哉　同
師の僧の曉の鉦や霧の中　同
霧晴れてトンネルを出る汽車見ゆる　同
霧晴る　鐘樓に僧の白衣哉　同



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 斷絃の記

徳永狂風

（一）

ある淋しき秋の夕、悽ましき罪悪と虚僞なる生活にみちたる首都を出で丶、孤影悄然として、或る街はづれに立つた。角の種畜商の豚も鷄も兎も、最早やすき褥に身を横たへたであらう。あゝ、されど顧みて高き街の甍を仰げば、石に枕する浮浪兒もあるべく、霜夜を乳なきに泣く孤兒も多いであらうに。

彼方の森は、うす絹の様な霧につゝまれて立つてゐる。其上に宵々毎にやどるてふ若い美しい夕づゝは、いと慎ましき光を地上に投げてゐる。あゝ、何といふ懐しき姿であらうぞ。罪なき思出も、已みがたき憧れも、さては命も、この地上にうけし妾ゆゑ、この夕ぐれの姿は、妾にとつては、慈愛ふかき母より、親切なる姉より、眞實なる友より、より懐しき人生の鑑である。然り、妾はこの寂然たる暮色の中に、暖かき育みの懐にまさる臥床を見る。されどそも現實の鐵槌に脆くやぶられ、思は再び悽ましき歴史を辿るのである。あゝ、この地よりして火を燃えしめよ、妾は其火に油をそゝぐであらう。さてはこの身悉く火とも燃やさむ、人の爲めに。——妾は今正義の戰に参ずるのである。

（二）

一月許り以前、妾は母と共に書生を連れて、父の所有してゐる或る大工場へ行つて見た。龍蛇の様な黒烟を吐く烟筒は塞の如く立つてゐる。陰濕い眞暗な所は耳を聾さん許りの機械の音、そこに多くの人は汗と埃に塗れて働いてゐる。妾はフト其中に愛らしき小兒を見て、先づ奇異の感に打たれた。その顔は少しも精氣なく、恰も冷たき石像を思ださせる。何故こんな所へ來てゐるのだらう。幼い疑問はそこに幽暗の一室を作つた。それから二、三、四、五と幾つもに仕切つてある工場を見た。何處の工場にも十一二の小兒を見て、妾は更に深き疑問に小さき胸をつゝまれた。其歸りである、亦元の工場を通つた時、人々がたゞならず騒いでゐるので、母に其理由を聞くと、たゞ悪夢から醒めた時の様な、堪へがたい面持で、逃ぐるが如く其工場を出た。暫くして書生に聽くと、母に秘密の約束で聽かされた一言「今の小兒は機械で殺されたのです」妾は重き悲しみを得た。たゞ無暗にその小兒が戀しかつた。

（三）

母はその明日から急に病床に就いた。そして或る夜、妾を呼んで、あらゆる父の非道を語られた。其中に彼の機械で死んだ小兒の事もあつた。熱い涙は玉の様に轉び出で、心臓はいと狂はしき響を傳へてゐた。妾は其暗示を知つてゐる。

この週、妾は逗子の別莊に始めて連れて行かれた。妾は別莊の住心地を知つた。けれども矢張そこで妾は泣いた。歳の頃十九か二十、くれなゐ燃ゆる紅の唇、珠玉銀簪を流す手指はいはずもあれ、後髪をかき上げる時などは、妾も其美さに熟々と見惚れる程である。聞けばこの女が父の妾であるとの事、あゝ、わが父は何といふ暴虐な人であらうぞ、而も父は基督教徒と稱し、業務の傍ら教壇にも立つではないか、立つて基督の愛を說くではないか。あゝ、基督の愛、信義とは果して斯の如きものか、基督教徒とは斯の如きものか。

―母の病氣は漸く重つた、父は自分の妻の大病も打ち棄てゝ、日夜この別莊に酒肴を呼び果ては彼女の膝を枕とするのである。さなきだに朝夕も離られぬわが母の御身、猶もどれ程の哀みを胸にたゝんで、幾度か落る涙を嚥み給ふ事ぞ。父が彼女に戯れて、其醉ふ如き艶態に思至る時は、わが母の瘠せ給ふ日である。されど、眼前に此憐れなる日陰に生つ妖艶紫花の如き彼女を見て、誰か亦た一片同情の涙なき者ぞ。身は簪の重さを上げず、多くの人を頤使するとも、彼女も共に奸悪なる社會てふ母の繼子である。光を求めて暗を與へられたる者である。而して醜欲劣情野獸の如き妾が父の爲に一個の玩弄品に化し了せられたのである。あゝ、花顔能く幾時ぞ、若し彼女にして淺き人生の春夢から醒めたならば、始めてそこに眞實にして温かき、而も虚飾なき秋に逢ふであらう。あゝ、わが同胞!、疾く醒めよ、其譎詐と僭濫の醜骸を脱して、疾と立てよ、わが兄妹! 妾は纖弱き女性の纖手なりとも、彼女をして深き人生の暗黒に咽ばしめたる冷酷なる社會を猛省せしめねば已まぬであらう。

（四）

別莊を出で首都に入つたのは昨日の夕、廿日あまりは走馬燈よりも疾く、手枕の夢よりも淡く果敢なく思はれた。たゞ微に濤聲松籟のみ耳邊を往來する。今も矢張り彼女は宏大なる別莊と、多くの召使とに圍繞せられて、淺き其日々々を送つて居るであらう。

直ちに母の病間を訪へば、たゞ懐しとのみ、妾を擁いて泣き給ふのである。あゝ、わが母も父が醜汚なる劣情に滿足を與ふべく、或夜横暴なる社會の手により捧げられたる人身御供なりしよ。この點に至つては別莊なる彼女と同じ運命の手に措かれたる者である。妾は濁れたる母の乳房に、そと手を觸れて久しき暗涙を覺えた。實に肩といへ腰といへ、枯葉落ちつくしたる篤のそれにも似たらんかし。

（五）

果して懐しき母は逝いた。その明る日の夕、母在さゞれば、この宏き邸は闃寂しき曠野のやう。陰冷の霧氣いと細やかに籠つて居る。妾は暫し堪へがたき鬱悶を慎ましく過した。其時始めて妾は機の到るを覺えた。

あゝ、想へば過こし方は恥しさに堪へない。妾が日常生活は粉黛と虚飾に飽きて、且つ恐るべき僞善の陰を以て蔽はれて居つた。さてもわが父の横暴は何時止むべしも見えない。妾はこの父に奉侍する程に良心は麻痺して居らぬ。妾はこゝに父と絶ち家を出で、世の横暴なる男子に向つて戰を宣するであらう。

志は既に決した。直に其準備をした。妾が假の父なる人、妾は今こゝに卿と絶つ、女々しき愛着なんど塵ほどもあらばこそ、たゞ纔に卿の健在を祈れば足る。卿は身を實業界に沒き、併せて基督教界の名士と因縁し、新聞記者を買收し、屢々政府と結托して、正直なる民衆を欺瞞して、竊に其膏血に飽いたではないか。卿はわが勞働者を虐殺する恩人である。誰かこの恩人に反き、その愛を卻くる者があらうぞ、されば妾は卿と絶ち、家を出で丶大に卿に報ゆる所あるであらう。かの土窟の如き暗黒なる陋巷に、激烈なる勞働と、窮乏なる生活と、悲惨なる運命に泣き叫ぶ顔面蒼白なる多くの婦人と、可憐蕾の如き幾多の小兒とを見、顧みて自ら悔ひ且つ愧ぢよ。さらずば卿は彼の印度の山中に棲むてふ淫悪なる狒々に劣る。あゝ、卿は妾が父ではない。見よ、わが父は彼處に在り。燦たる自由、燦々たる平等、藹々たる博愛。

あゝ、卿はわが父ではない。妾は卿の人道の仇敵たる事は永劫に忘れられぬ。さらば、妾が假の父なる人、今妾は家道に呼いて遠く走る、或は近く卿と彼の人道の戰場に於て相見ゆるを得るであらうか。

（六）

暫し休ひの石は身體の爲に濕むだ。あゝ冷々たる石にも血は迸り、涙は流るゝやう。オー開けたる口よ叫べ、世に在る多くの可憐なる女子の爲に、而して横暴なる男子をして女子の前に戰慄せしめよ。あゝ、汝が叫ぶ秋は今なり。紳士閥が公然の悪事を見て而も默して止む者多き、而して筆を枉げて奸悪なる貴族と富豪を辯護し且つ阿諂する者多き今の世に。あゝ、今の世は久しく汝を俟つ。妾は石と相擁いて泣いた。はふり落つる涙は石の凹みに落ちて行く。あゝ、悲しき石よ、汝の世に在る、熱き涙の慰めにまさる。妾は、疾く人の來らざるに遠く離れねばならぬ、行末運命の奔流は如何なる流れに妾を措くかは未だ知るべからざれど、亦た好き機の夕もあらば、再び汝と相擁くであらう。

深夜の大氣は心の底の底まで浸みわたるやう。遠く顧みれば、近くひた〳〵と何者か妾を追ふて來るかのやうに黒き夜の帳の揺れ。妾は再び立つて足を運んだ。あゝ、今宵はいと美しき星夜である。（完）

## 革命の曙光

中館紅涙

銀燭冴ゆる玉樓に
浮世を外の貴人が
榮華のかずをつくす時
歯車きしる工場に
餓に追はるゝ平民の子は
肉裂き骨しぼりゆく。

わはや貴人今はしも
虚榮の酒に醉ひしれて
斷崖の上へ迷ふとき
自由と慕ふ平民の子は
正義の旗をひるがへし
理想の郷にすゝみゆく。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

## 婦人開放の道

禄亭生

大凡人間の行爲は其境遇の反影たるを免れず。愛に燥ける家庭の人は出で、放佚の樂みに耽り、雇者の壓迫に苦しむ職工は歸りて其妻女を虐待せずんば止まず。然り、境遇に制せられずして却つて之を制し能ふものは、百千萬中僅かに一人を算ふる偉人のみ、而して人各々偉人たらんとして自ら努力するは甚だ可なり、但だ之を他に責めんとするに至つては寧ろ酷なりと言ふを得べし。

畢竟、戀愛の自由と勞働の權利を樹立する、これ婦人開放に對する必然の徑路なるに非ずや。

## 戀愛と結婚

禄亭生

戀愛の自由は結婚によつて終審の判決を與へられたるものに非ず。但だ人は結婚に伴ふ係累の增加によりて、自然と自由の元氣を減殺し去らるゝなり。

宗敎のドクマを外にして、一夫一婦は正理なりと斷定し得べき根據あるに非ず。但だ一夫一婦は錢の要ぬもの、便利なるもの也との事實より歸納して、初めて之を正當なりと言ふべきのみ。

## 男女重ネの寸法

軍地うら子

男女重ね下着の寸法のつめ方標準は皆各各にて、其確實なる寸法が御分りにならない方が多くあるやうに思はれますから今より夫を申上ます。

男服下着つめ方寸法。

行は上下着共同寸法、
袖丈は上着より三分つめ、
袖口同じ、袖巾同じ、
袖付三分つめ、人形上下同し、
身丈一分つめ、
衿肩一分つめ、
後巾一分つめ　前巾二分五厘つめ
衽巾上下着共同じ
褄下同じ
衿巾同し衿丈三分つめ全體にて六分つめ

女服下着つめ方寸法、

袖丈下着より三分つめ、
袖口同寸法、袖付一分つめ、
行上下着とも同寸法、
身丈普通一分、上着七子、下着縮緬樣の物なれば二分つめ、
後巾一分、
前巾二分、
衽巾下にて一分つめ相褄巾同寸法、
衽下り同し、
衿丈三分つめ、衿巾同じ、

羽織寸法につきては種々なる說がありま す。或人は着物より行を一分つめると云ひ、或人は一分廣くすといふ、併し經驗する處によれば、羽織行は着物より一分つめし方よろし、袖口袖付は同じ、袖丈は二分羽織の丈を長くす衿肩は一分廣くする方よろし。

## 平民樂話

黒瀨なか

○社會主義の行はれる世の中になつて、總ての人間が衣食のために、甚しく心を勞する必要の無い樣になれば、其の影響を受けて、先づ著しい發達を遂ぐるものは諸種の藝術で御座いませう。

○また現在の如く、生活に困難な社會に於きましても、妾どもが日常の勞苦を醫するために、最も力ある物はやはり藝術の快感で御座います。

○眞の藝術は、平民の額の汗から湧き出るもので、貴族の床の間や、富豪の奥座敷から生ひ立つ物では御座いません。

○さて妾どもは、今日如何なる藝術に慰藉の道を求めたら宜しう御座いませうか……妾は第一に三味線樂を推奬致します。

○三味線と申しますと、當今の女學生方は、直ぐ此上も無い野卑な鳴り物の樣に思召すでせうが、そんな方々は御自分の結つて居らつしやる廂髪が、西洋の下女風俗である事を、頓と御存知ないので御座いましやう。それで只何でも高尙々々と、歯の浮く樣な音をさせて、御自分にも薩張り趣味の分らぬ、舶來の樂器を御彈きになつたり、態々御師匠樣の盲聾まで御眞似になつて、意味の連絡も無い、琴の組歌などを御稽古なさいます。東京音樂學校にも、箏曲科の設けは御座いますが、三味線科は御座いません。演奏會の貴族的なのも眞に尤な次第です。

○洋の東西を問はず、樂器界で三味線程、艶のある微妙な旋律を有する物は他に御座いません。騒がしいオルガンやピヤノの複音に慣れた西洋人の鼓膜には、それも何んなにメランコリーに響くか知れませんが、主となるべき先入者の無い公平な樂耳を持つ人に聽いて戴いたら、三味線樂の特質は、決して其んな陰氣なもので無いと云ふ事が、明に認められましやう。

○妾は、頑迷なる世の歷史的國粹保存論者に反對致しますと共に、また沒趣味な歐化論者にも、あながち同意を表し兼ねます。日本と云ふ人爲の國は亡びましても、富士山頂に積る自然の白雪が消えぬ間は、其の麓に育つた人種に、特有の樂風は滅しますまい。三味線樂の壽命は決して神武天皇即位紀元何年を以て數へる事の出來るものでは御座いません。

○樂器の安いと云ふ點も、また三味線は無類です。四五圓も出せば、紫檀棹の立派なのが手にはいる、一臺千圓もするピヤノなどゝは比べ物になりません。三味線は實に、妾ども平民の樂器として、遺憾なく先天の使命を全うしたものと云はれます。

○が、此の結構な三味線樂にも、また一つの欠點が有る。それは在來の歌詞に極めてノンセンスな若くは淫佚な作品の多い事であります。之がため折角の妙曲も、大部分は其の美感を削がれて仕舞うのは實に殘念な次第で御座います。

○然し妾は此の欠點も、永久決して除くことの出來ないものとは思ひません。それは矢張り何うしたら善いかと云ふに、一種の革命手段に訴へるより他はない即ち、歌詞の改作です。

○凡そ三味線の節付けと云ふものは、極めて困難なもので、今日世上に行はれる名曲の多くは、決して一朝一夕にして出來上つた物では御座いません。西洋の音樂の樣に完全に發達した、數理的記譜法と云ふものも御座いませんし、オルガンやピヤノと違つて、たつた三筋の糸の上り下りで、あらゆる音階の變化を現さなければならぬのですから、餘程天才に富んだ者で無ければ、之に手を付けて成功する事は六ケ敷いのです。其の證據には近頃の新作と云ふ物は、皆名ばかりで一つとして古人の糟粕を嘗めぬものは御座いません。

○それで妾は變則ながら、こういふ策を取つて見度いと思ひます。其れは、在來の曲に應じて、盛んに新規の替唄を作る事で、少しく歌詞と樂曲との調和に意を注いだら、これは必しも、決して出來ないといふ事はありますまい。總じて音樂家の曲に依つて現はす事の出來る感情は、極めて漠然たる抽象的のもので、如何にベートウフエンやモツアルトの巧みな作曲を以てしても、其の歌詞を離れては、到底聽者に具象的の感覺を與へる事は出來ない。こゝが又面白い所で、極端な男女間の戀情を表するために節付けされた、新内の「明烏」の樣な曲でも、之を轉用すれば直ちに母子相愛の觀念を現はしたものとする事が出來ます。要は三味線樂の特色を失はぬ樣、飽くまで平民的であり度いことです。

○革命の動力は人間の感情である、人間の感情を支配するものは詩歌である。詩歌の音樂と結び付いたものには、一層適切に此の働きが現れます。佛蘭西革命を成就した功力の半ばゝ、之を勇壯なる馬耳塞の歌曲に歸しても可いでしやう。古老の言に依れば、維新の際に於て、トコトンヤレ節の士氣を鼓舞したことは、一と通りで無い、とても今日の軍歌などゝ比べ物にはならぬ相です。足尾の勞働者が、俚耳に遠い「富の鎖」などよりも、却つて卑俗な至誠會のラツパ節に因て、常に其の自覺を促しつゝ在つた事も、亦妾ども社會改革に寸志ある者の、聊か反省を要する點では御座いますまいか。

○『藝術の爲の藝術』とは、遊んで飯を食つて居る事の出來る階級に育つた、有つても無くても善い藝人たちの云ふ戲言です。妾どもは目に視、手に觸る、何物をも取つて、之を社會改革のために驅使しなければなりません。

○此の目的で、妾は只今熱心に、五年以來閑却して居た三味線の、思ひ出し稽古を行つて居ます。霞外さんの事業を御援けする樣になるのは、何時のことでしやうか。

## 霜

おく霜や今朝異國へ向ふ人　とよ
小窓から遠き火事見ゆ霜夜哉　なみ
君かへる妻戸を押せば霜白し　なみ
ジー〳〵とラムプの心の霜夜哉　なみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 於内外大博覽會受領
# 名譽金銀一等諸賞牌

**體操及び運動器械**
**樂器及び教育用品**
**生理學模型**
**博物學標本**

日本東京市本郷區本郷五丁目特電下谷八四五

宮内省諸官衙、大學、師、中、小學
清國大學堂、師範學堂　御用

**美滿津商店**

昨年來より増築中の陳列所落成候につき聊か陳列致し置候間御序の節御一覽御用命を乞ふ

---

○**基督教こどもの本**　文學士倉橋惣三君編　第一編『ひらくさ』第二編『なみ子のいす』（以下順次刊行）　定價六錢　郵稅二錢

○新體詩集**小野のわかれ**　文學士小山内薫君著　定價二十錢　郵稅不要

○**繪入キリスト物語**　中村春雨君著　定價十二錢　郵稅不要

○**加拉太書研究**（近刊）　宮川巳作先生著

○女流文豪**ジョルヂ、エルオット**（豫告）　松本雖君著

發兌　東京神田區猿樂町二十五番地九段通　**中庸堂書店**

---

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢

本舖　ライオン歯磨發賣元　東京神田柳原川岸　**小林富次郎**

---

讀書家必携　**會讀錄**　定價廿五錢　郵稅四錢

會讀錄は讀書にあらず、讀書家の記憶力を補ひ且之れを養ふ備忘錄なり。則ち閲讀したる書籍に關して、書名、著者、發行年月及發行所、閲讀したる時と場所、目錄概要、引照の頁、評説及引用等を錄記して讀書の印象を深くし、一度咀嚼したる快味を永く保存して、時に應じて反覆其快感を新ならしめんとする者なり、篤學の士を始め凡讀書家特に學生の知識に缺くべからざる良冊にして、且每葉讀書に關する訓言を附したれば知らず〳〵好學の趣味を皷舞增進するの裨益あり

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　**警醒社書店**

---

- ハリソン原著松本春枝譯　青山學院教授山田寅之助先生著　一**兒童研究**　定價上製七十錢　並製五十錢　郵稅八錢
- 神學士田中達氏著　一**旅行談**　定價五十錢　郵稅十錢
- 根本正氏著　一**人の運命**　定價二十錢　郵稅四錢
- 根本正氏著　一**日々の力**　定價皮七十錢　布五十錢　紙卅五錢　郵稅六錢
- 根本正氏著　一**青年立身傳**　定價五十錢　郵稅十錢
- 根本正氏著　一**女子立身傳**　定價四十錢　郵稅十錢
- 渡邊房吉氏著　一**青春の危機**　定價三十五錢　郵稅八錢
- 磐川金敎氏著　一**野百合**　定價二十五錢　郵稅六錢
- 疋田彰爾氏著　一**小供の爲め**　定價二十錢　郵稅六錢
- 堀口彌摩吉君譯　一**家庭清話**　定價二十錢　郵稅六錢
- 五來素川君譯　一**未だ見ぬ親**　定價五十錢　郵稅十錢
- コルテス夫人著　一**家庭教育**　定價十錢　郵稅二錢
- 古谷新太郎氏著　一**はなしの園**　定價二十五錢　郵稅四錢
- 山鹿旗之進氏著　一**幸福の生涯**　定價三十五錢　郵稅六錢
- トーレー先生著　一**人を基督に導く法**　定價二十錢　郵稅四錢
- 佐藤廣吉氏著　一**平和の福音**　定價四十錢　郵稅六錢
- ホワイト氏著　一**基督に到る道**　定價二十錢　郵稅四錢
- ワグナル氏著　一英文**單純生活**　定價五十錢　郵稅八錢

東京銀座四丁目一番地　内外書肆　**教文館**　電話新橋二二五二六

---

---

● **齒科治療**　自午前八時至午後六時 ●

齒科醫　**吉瀨才一郎**　神田區須田町廿六番地

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

---

新築落成移轉

小兒病　内科　外科　**診療**

府下淀橋町角筈（水道前）

**淀橋醫院**　**竹下繁太郎**

---

食パン洋菓子及食料品一切

東洋製菓會社山手特約店　**中村屋本店**

本郷區森川町　電話下谷二一七八

---

# 東京各書店出版
# 圖書類一切
## 取次販賣廣告

▼平民書房は市内各書店出版の圖書類一切を最も親切に最も迅速に取次販賣致候

▼御注文の際は著者、發行所、書名、代價及び屆先明瞭に御記入被下度候

▼若し御不審の廉有之候はゞ郵劵封入若しくは往復はがきにて御照會被下度候

▼御送金は東京市本郷區眞砂町局宛、郵劵代用は一割增に願上候

▼一時に貳圓以上御注文の方には『讀書の栞』一ケ年分無代進呈可致候

東京市本郷區弓町一丁目二六

**平民書房**

---

安部磯雄著

# 理想の人

**第三版出づ**

倫理宗教教育家庭社會の五編に分つ四六判形紙數四百八十有餘頁　金七十錢　郵稅八錢

東京市京橋區五郎兵衛町　**金尾文淵堂**

◎定價　△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢
東京府豊多摩郡淀橋町角筈七六二番地



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY